

明治後期の社会思想と哲学館

吉田久一

(東洋大学社会学部教授)

一

社会学部にご厄介になっております吉田です。宜しくお願ひします。高木先生からお話がありまして、今は社会福祉が専門で、三十代から四十代のごくはじめ頃までやっていたことを、三十年前にもう一回引き戻してお話をするようなはめになりました。余り新しいことを付け加えることもありませんが、宜しくお願ひします。

私は円了先生と一緒にこの学校の基礎をつくられた清沢満之という、ご存じの方がいます。清沢満之については小さい本を一冊書いています。それが三十年たちまして、絶版だったのを今度複製をするということで、もう一回世に現われるというはめになりました。ひとつも手を加えてないので、三十年前そのまま出るわけですが、満之と円了とを比べます時、どうしても近代思想とか近代信仰ということになると、どちらかというと円了先生の方が、満之が悪い。清沢満之はご存じの通り日本の仏教の近代信仰化をはかった人ですから、私もどちらかというところ、近代化の面からみていつたきらいがあります。

それからもうひとつは、私は日本プロテスタント史研究会の最初からの同人で、故小沢三郎氏や高橋昌郎さんとかずと一緒をやってきました。私は内村鑑三をずつとやってきたんですから、内村対円了となりますと、これはご存じの通り「教育と宗教の衝突」事件というのがございますね。ここでもちよつと敵役みたいな形に円了先生がなっているもんですから、どっちかという面が若い日の私にはありましたわけです。

ところが最近になって痛感しますことのひとつに、どなたもおっしゃることだけれども、円了先生があのまま東大にいて哲学をやっていたら、恐らく日本の哲学の基礎をつくり、そして日本の最高の哲学者になったことと思いますけど、やはりそれをふりきって哲学館をおつくりになり、民間の啓蒙家として終始された。これは大変日本に得難いことだと思っているわけです。今、私所屬しております福祉専攻の方でも、東洋大学は社会福祉に対して非常に多くの人材を輩出しているわけですが、それは皆さんご存じの安藤正純、のちほど早稲田にもいきましたけど、安藤正純氏が私設社会事業連盟の理事長で、そしてその常務理事というのが昨年亡くなりました東洋大学出の高木武三郎という日本の私設社会事業を動かしていた人です。そのほか非常にたくさん人がおりますけれども、日本の社会福祉の世界で、東洋大学はどういう位置かといわれれば、まぎれもなく「在野」というところでしょうね。やっぱりそれは円了先生などの影響ということだろうと思います。ですから私は現在は、日本で大変得難い、しかも非常に重要な在野の問題を提起された方として、尊敬申しあげてもいいわけです。

そこで、今日お話しいたします際、円了先生に即さなくてもいいかと高木先生に申し上げたらそれはかまわないというお話 شدったもんですから、テーマのように明治後半期の社会思想に果たした哲学館の役割のお話を少ししてみようかなと思つてまいったわけです。これは東洋大学であんまり言われていないようでありませけれども、大変惜しいことだと思ふんですね。明治後半期の日本の社会思想史に役割を果たした人びとが、東洋大学には東洋大学自身の

お立場があるんでしようけど、円了先生が賛成でないということのために、折角もつたない宝が沢山あるのに、それが取り上げられないということは大変残念なことだと思ふんです。高木先生、僕は来年三月辞めますけれども是非百周年の時には、東洋大学全体のオーソドックスな歴史からいけばアウトサイダーに違いないだろうけれども、そのことを是非残して学生諸君をも元気づけて下さい。これは遺言みたいな話になってきまして、申しわけありません。具体的に申しますと、皆様よくご存じの「新仏教運動」という形をとってくるわけです。私三十何年前に新仏教運動について書きまして、今まで仏教なんて古臭いと考えていた人びとが、近代思想の中に仏教もそういう役割を果たしたのかということ、評判になったことを覚えています。たとえばその頃まだ仏教史をやっておりました家永三郎氏などが宣伝してくれたり、あるいは東大の史料編纂の、非常に地味な人でしたけど伊藤多三郎という教授がおりました、長い紹介論文を書いていただいたり、いろんな若い頃の思い出であります、そういう明治後半期に果たしました哲学館の人びとの役割みたいなことを申し上げたいと思つてゐるわけです。

二

そこで新仏教運動に焦点があたるわけですが、この会は別に会長だとか、なんだとかあるわけではございません。その一番の首領格になるのはご存じの何代目の学長さんでしたか、境野哲、大きな学問的業績もある人ですが、境野黄洋、次に一般的に知られていますが、高嶋米峰と、高嶋米峰氏は私の国もとの人で、米峰の「米」は米山の米からとっております。私は米峰氏の息子さんなんかもよく存じております。この二人が中心で、あとは哲学館の哲学の講師かなんかしていた田中治六、我観とも申しましたけれども、まあ哲学館の卒業生たちが大部分と、それにこの人たちの親友でこの大学の教授もしておりますけど、渡辺海旭という、兼任教授なんです。こういう人たちに朝日

新聞に今でも名前が残っておりますが、杉村楚人冠、それから神道学者の加藤玄智氏、高木先生はご存じないでしょう。僕たちは直接習ったです。こういう人が同人となっております。ですけども、境野先生に言わせれば、この新仏教運動の本をつくった人というのは、明治思想史に将来きつと生き残ると思う古川勇、号は老川、この人は哲学館じゃないんですけれども、いるんです。この人は境野先生と生れた年が同じ年ですけれども、明治二十七年に書きました「懐疑時代に入れり」という論文があるんです。その「懐疑時代に入れり」という論文が、恐らくもう少し日本の社会思想史の研究が進むと、必ず特筆大書される論文だと思えます。つまり、明治二十七年という日清戦争が起りました時期は社会的にも転機でありますけれども、思想的な非常に大きな転機で、その転機を呼び起す論文が、「懐疑時代に入れり」で一つの役割を果たしているんです。清沢満之も二十七年からやがて近代信仰をつくっていくわけです。古川老川は二十八歳で、明治三十二年というちょうど新仏教運動が誕生するときに亡くなってしまいました。村上專精、ずっと東大の教授をしていましたね、村上專精はご存じの通り「大乘非仏説」を掲げ、仏教統一論を論じたのもこの頃です。こういう動きが三十二年にまだ新仏教運動と言いませんでしたが、「仏教清徒同志会」、「清徒」は無論ピューリタンからとつてきているわけですが、仏教清徒同志会というものを作っていくわけです。

この同志会の背景にありますのが、これは本来ならば井上円了先生がなるべきだったと思うんです。だけど、先生は一つ時代が前で、「活仏教」ということを盛んにやっていたんです。つまり旧仏教というものを生かす方法を考えられたわけですね。新仏教の人たちは文字通り新仏教なんで、新しい仏教をつくりあげるということですから、これは行き方が違ってきましたわけですね。そういうことを井上円了先生自身も書いていらつしやいます。結局その新仏教運動のバックになるのは、さっきの村上專精が学問的な、あるいは思想的なバックになつていきますし、また保護者みたいな形になるのはご存じの井上円了先生と一緒に『日本人』をおこしました三宅雪嶺、だから新仏教運動のパトロ

ンということになれば、思想的にも若干経済的な意味でも村上專精と三宅雪嶺です。なお申し忘れましたが、新仏教運動と改名しますのは三十六年三月です。そこにお配りした「我徒の宣言」というのは一番の中心人物の境野黄洋が書いたのですけれども、そこに六つあります網領が、結局新仏教運動の基本になっているわけですね。それをお読み下さればよく分かるわけですけれども、まず社会の改善、自由討究、迷信の排除、宗教的制度を保持する必要はない、政治上の干渉を排除等の六つが網領です。三十二年に仏教清徒同志会をつくって、三十三年に『新仏教』という雑誌が発刊になります。これ図書館に保存されていますか。ときどき発売禁止になるわけです。その分がもし東洋大学にあるとすればこれは大変な貴重なものになるわけで、発売禁止になったのはつぎの三号です。十一巻の九号、これは大逆事件の真ん中の出版ですが、それが発売禁止となるわけです。それから、二回目は、十四巻の十号、ご存じのように日本というのは、刺客というか、首相かなんか刺すでしょう。ああいうのが流行する国ですから、それに対して正面から否定します。しかし刺客というのはかなり心情的に国民を湧きたたすときもありますんでね、それを真正面から批判して否定するわけです。ちょうど十四巻か十五巻の頃がそういう事件がいくつかあって、それで国民感情がそちらのほうに傾くというふうな面もあった中です。それで発売禁止。それから十五巻の五号も発売禁止です。これは「平民擁護論」という論文によつてです。私は、国会図書館でね、私らの若かった頃は出入りが自由で、今はやかましいんでしょうけども、それでかき回して、あそこには印刷物全部届けることになっているでしょう。その中から三号出して補填をしたことを覚えています。だから他にはないと思います。発売禁止ですから。もしここにあればね、これは大変に貴重なものになると思います。なお、この『新仏教』という雑誌は、五・六年前に、その雑誌の論文は復刻をされて上・中・下と三巻出ていますけど、しかし残念なことには、むしろ雑録とかに大事な記事もあるわけなんです、それが入っております。

そこで、具体的にですね、明治後半期の社会思想に貢献したことを、哲学館の出身者だけに限って、お話し申し上げてまいります。この綱領からいきまして、当然第一に考えられるのは国家との関係ですね。これには『新仏教』が対決しなければならぬ問題三つあるわけで、一つはご存じの通り三十年代の始めに内地雑居ということがあって、それにつれて仏教の公認教運動というのが展開されるわけですね。これは宗教法案と一緒に議論されるわけですが、でも、この中でこれは円了先生と同じ大谷派が中心になってこの運動が進んでいくわけですが、これに対して新仏教運動がキリスト教と仏教と平等なんだということを申しながら、その反対運動の先頭に立つわけです。むろん『新仏教』という雑誌のほかにも、さつき申し上げました渡辺海旭が、これは浄土宗なものですからそこで出ている『浄土教報』、それから、ここ一週間ばかりNHKの第二で取り上げています『中央公論』、『中央公論』はご存じの通り本願寺の雑誌ですが、やはり『中央公論』がこの時期に公認教反対を言うわけです。しかし一番中心になっているのは『新仏教』で、境野黄洋と高嶋米峰を中心にして展開されるわけです。

それから第二の場面では、三十九年六月九日に、文部省訓令第一号というのが出るわけですね。これはご存じの通り日露戦争が終りました、そして日本が段々資本の輸出なんかをせずと朝鮮、満州と出ていくわけですね。それにつれて本土の方を固めなくちゃならないということもあって、まず社会主義運動の弾圧と、それからもうひとつはむしろ文学の方に現われたんですけれども、例の自然主義文学ですね。現実を暴露する、つまり別の言葉で言えば、日本で淳風美俗としてあつかってきました家族や地域の相互扶助みたいなことを、その護持という観点から文部省訓令第一号というのがでてくるわけです。これに対して正面からくつかかっているのは境野黄洋。彼が書きました巻頭論文は「教えなき国 文部大臣の訓令を読み」というものですが、とくにこの中で黄洋が訓令の中にあります極端なる社会主義という言葉にくつかかると、これは社会主義全体を否定するのか、あるいは極端な社会主義

を否定するのか、これが論法のたて方です。ついでに申しあげますとこの頃の社会主義というのは非常にのんきな社会主義でして、片山潜という共産党をつくった人がご存じのように水道や電灯までつくることを社会主義だと考えていたんですから、むろん境野黄洋のいう社会主義というようなものも非常に穏健な社会主義なんですけれども、それまで否定するのかというのが、黄洋の一番の論旨であつたようです。その他沢山論文がありますけれども、文部省訓令第一号というのは大変著名な訓令ですけれども、これが第二の場面です。

それから第三の場面はよく御存じの三教会同、これは四十五年二月二十五日、原敬内務大臣が主催でありますが大逆事件の直後に行なわれるわけですね。大逆事件というのは実は仏教の坊さんが三人はいつておりまして、そういうことなどがあるもんですから、そこで三教会同と、三教というのは神、仏、基ですね。そこで「皇運を扶翼し、益々国民道徳の振興を図らんこと期す」というようなことを決議をいたすわけです。まさに宗教が政治に使われるわけです。政治の宗教利用という話ですから、それに対して正面から批判をし、具体的な運動も起し、同時に決議文というものを入務次官のところを持つていくというのが新仏教運動で、ここでも境野黄洋、高嶋米峰という線で作るわけですね。たとえば、米峰が『新仏教』に書きます著名な論文は「内務省の宗教対策を笑う」というものですが、それだけにとどまらないで、具体的に社会運動として展開をしていくわけですね。神田あたりで宗教利用問題大演説会なんていうのを開くわけです。当然、神田警察の方で取り締り、ないしは警護して、そして目を光らせている中でやるわけですが、このときの黄洋が大変内容のある講演をしているわけです。「国家と宗教」です。それから同志会が中心になりまして、具体的にいうと黄洋、米峰ですが、仏教主義新聞雑誌記者会というものを結成いたします。明治時代の仏教雑誌というのはかつて数えたことがありますけれども、数百に達すると思います。今はいくらもありませんね。この新聞、雑誌記者のうち反対の人を集めてそういうものを結成したりして、そしてその記者会を代表して反対

決議を、具体的に三教会同を演出しました床次次官ですが、そこへもっていつて突きつける。国家との対決ということでは公認教運動と文部省訓令第一号と三教会同だと思えます。そこで第二の場面は、御配りしたこの出身者で先生もりましたが、林竹次郎、林古溪、かなり名の通った詩人でもありましたね。この人が書きました詩をそこに出しておいたわけです。

日露戦争の真ん中で境野が「余が戦争説」というのを書くわけですが、その中で反戦論とは言いませんけれども、自分を非常に穏和な社会主義者だという規定をしながら、戦争と仏教の関係を書くわけです。そして言うまでもありませんけれども、戦争は理性を失った行為として書いていくわけです。しかしそれよりも今日ご紹介してみたいと思いますのは、そこに出しました林古溪の「兵馬倥傯」という詩ですね。この詩は三十八年三月に出た詩でして、ちょうど日露戦争がピークに達した頃ですね。ちょうどそこへこの詩を出しているわけです。私若い頃にやっておりました内村鑑三の非戦論というのは、高等学校の生徒も知っているほど有名ですけれども、内村非戦論というのは戦争がはじまったはじめの時期で、だんだん後退していつてしまいうわけです。それに対して林古溪の方は、戦争の一番のピークのところで厭戦詩を出しているわけです。これはお読みくださいればよくわかる詩ですけれども、この詩をながめて、すぐ連想されますのは有名な与謝野晶子の「弟よ、君死に給ふこと勿れ」というものでしょうが、そこに流れているのはロマンチズムで、自分の肉親の問題ですね。それから大塚楠緒子の「お百度参り」もそうですね。林古溪という人はどこで生れたか、よく知りませんが、この三十八年というのは、東北は大変な凶作ですね。それに戦争の負担が加わるわけですね。それをよくぞおさえながら、この詩を書いている。そういう意味ではリアリティに満ちているわけで、これを読んでよく分かりますように、たとえば「昨夜はしも、車を徴られ、今日はまた、馬めし出され、明日こそは、我子征戦べき。」と、具体的に農村の実情を歌い込んでいるわけです。いちいちご紹介する時間がない

のは残念ですけれども、「馬たらず、馬をせめとり、人足らず、人を召しよせ、車足らず、車めしあげ、銭足らず、みつぎまた取る。」という具合です。詩としてもかなり美しい詩なんだろうが、こういうものを出しているわけです。史家の家永さんはこの詩の発見をよろこびましてね、ああいうタイプの人でしたから、これを方々に紹介して下すつたことを覚えていますが、林古溪という人はここの出身者ですから、かなり宗教的な側面が濃厚な人だったと思います。恐らくそれは社会的な反戦論じゃなくて、むしろ宗教的な非戦論というものだと思いますけれども、よくぞこれだけのものを書いたという事で、言ってみれば驚きですね。

三番目は社会主義との関係を取り上げてみようと思います。むろん私は新仏教同志会は社会主義団体だと思いません。今そうそうに結論を出すことはよいことじゃないかもしれませんが、私はどう考えてもリベラル左派という線、ぎりぎりのところまでいったとしても、それを超えないと思います、この運動が。けれども明治後半期という社会主義の苦しい場面のときに、よくぞ社会主義者たちと新仏教の人たちと交わりを続けて、その交わりを続けることによって、社会主義者たちはまさに冬の時期を持ちこたえていくという事で、これは新仏教の側だけじゃなくて、たとえば堺の平民社の側からもそういうことを書いているわけです。堺なんていう人は苦勞人ですから、そういうことを書いているわけです。そこで新仏教、とくに境野黄洋、高嶋米峰と親交を結んだ社会主義者を上げると、幸徳秋水、それから堺利彦、西川光二郎がおります。それから哲学館をでました日本の代表的な社会主義者・無政府主義者ですが、石川旭山（三四郎）がおります。私はこの人の晩年に何回かあったことがあります、寝ているところで話したこともありましたが、やつぱり東洋大学出身者として掘り出しておく必要がありますね。社会主義を取るとか、取らないとか、そういう問題じゃなく、学校ではやはり歴史としてきちんとしておくということが、非常に大事なような感じがします。それから木下尚江ですね。こういう人たちが親交を結んでくるわけです。むろんさきほど言いま

したように、新仏教運動は社会主義団体ではありません。新仏教運動の革新性とか、自由討究、今でいえば言論の自由ということでしょうか。それから政治権力に対する非常な抵抗感というふうなものが先にたっているわけですが、社会主義者と親交があるものですから、絶えず高嶋米峰などは尾行がついて、むろん境野黄洋もつきまします。高嶋米峰という人は枯れたおもしろい人ですから、私も覚えていますときでも、東洋大学の前に古本屋を開いて、丙午出版社といいましたかな、それで丙午出版社をやつてながら東洋大学の学長になつたんじゃないですか。そんなふうな大変おもしろい人で、米峰が探偵を連れて歩くといつて自慢している文章がいくつもあります。探偵が尾行しているといつて、得意になつてゐる文章があります。しかしさきほどから申しておりますように、新仏教運動というのは社会主義運動じゃありません。社会主義運動というのは必ず、生活とか、労働とか、そういう問題の中に出てくるわけですから、これはヒューマニストですよ。もし貧困の問題があつたとしても、そういう貧困者に対する愛情とか同情とかそういう問題でして、社会を変革するということじゃない。

それから、今ならそんなプリミティブなことは言わないけれども、この頃は社会主義運動にとつても初期の時代ですから、社会主義という唯物論ですが、ところが唯物論は言うまでもなくキリスト教に対して出てくるわけですが、ところが仏教というのは社会主義者の側から言うところの汎神論とみて、これは唯物論も唯心論も両方をもつてゐるところみるわけです。だからキリスト教よりもはるかにちかいと考えちゃうんですね。これは今から言えばかなりナンセンスな面があるとしても、その時期ではそういうふうにか考えた。そこで両方の綱の引つ張りあいです。新仏教の方にすれば、おまえたちの方は精神の方が足りないんだから、おれの方に来いということを言いますし、それから社会主義者の方は、キリスト教よりおまえたちに近いんだからおれの方に来い、そういう素朴な愉快といえは愉快な時代だったんでしょうけど、そういうことで『新仏教』の雑誌の中でもかなり長い論争が続きます、社会主義者と新仏教

徒との。ですけれども、この論争は両方もやや楽しんでやっていると云うような感があります。主人公は、一番の中心はむこうは堺利彦、この人は枯れた人でもおもしろい人ですから、こちら側としては哲学館の田中我観とか、それから高嶋米峰とか、この間で論争がおきてくるんですけども、ちょうど大逆事件前後にはいつて社会主義が冬の日に入っていく中で、むこうとしても大変しみだつたらしいです。この冬の日の間の両者の親交というのは、見落されてる問題ですけれども、残しておく必要があるんじゃないか。なお四十三年に大逆事件が起りますが、このとき境野黄洋が「過渡時代と極端思想について」という論文を書きます。この論文がきっかけで結局発売禁止ということになりますけれども、そういうことで社会主義運動との関係ということがあります。

それから四番目に取り上げてみようと思いますのは、社会運動との関係であります。これは御存じの現在の公害の原点といわれる「足尾鉍毒事件」、これに対する新仏教徒同志会の運動であります。むろん論文もたくさん新仏教誌の中に書かれますし、それから具体的に募金をしましたり、あるいは現状調査をやりましたり、いろいろな動きをみせます。なお新仏教運動の大変有力な同人ですが、これは東洋大学の関係者じゃありませんけど、ご存じの伊藤左千夫という歌人ですね。新仏教誌に出しました「鉍毒被害の民を哀れみて詠める歌」、これが有名な歌になりましたけれども、新仏教誌に発表されたのが最初ということでもあります。社会運動としては足尾鉍毒事件が中心でしょうね。ただもう一つ当然あるべき労働運動というのは、これは論説などかなりありますけれども、弱いですね。それは仏教全体が労働運動に対する答案をもっていない。これは一番近代の中での弱いところだと思いますが、新仏教運動も例にもれません。和田不可得、覚二といいましたが、この人が労働運動について論文を出しますけれども、東洋大学をまだ出たばかりだと思います。申し忘れましたけれども、新仏教徒の大部分が二十代で、三十代が少しですね。明治の人はみんな早いですけれども、それにしてもずいぶん早いですね。

それから第五ですが、なんといつたらいいでしょうか、風教問題とでもいいましようか、ここは仏教のお箱なところですが、仏教はキリスト教からずいぶん遅れているわけですが、新仏教運動がここに狙いをつけていろいろ活動するわけです。まず廃娼運動というのは明治の社会にとりましては非常に大きな出来事です。これはほとんどと言っていいほど、キリスト教なんです。ところが新仏教運動は廃娼運動を正面から取り上げていくわけです。仏教というのはむしろ存娼へまわるんです。それはなぜかと言いますと、やはり檀家があるわけですよ、吉原の方に。あるいは方々に。廃娼では飯の食いあげということになるでしょうし、それから神社と寺院の近くに遊び場所があるということも含めて、仏教は存娼論だと明治では一般に見られているわけです。新仏教の公娼廃止の理由ですけれども、これは大変いいところを突いていると思うのは、やはり人身売買という、人道に反するということです。単なる倫理とか風教だけじゃありません。つまり日本人がなかなかもちにくい人権とか、人道とかとの関連で人身売買だということから論を立てているわけですね。これはいいところを突いているわけです。具体的には明治三十三年、新仏教ができた翌年ですが、大日本廃娼会に加盟いたしますしね。

それからその次に禁酒禁煙運動ということですね。これはもつとも熱心なのが米峰で、大変おもしろい人で運動では何時も先頭に立ってやる方の人として、米峰自体熱心な禁酒論者であります。仏教の方の禁酒運動というのは、『中央公論』のもとになる『反省会雑誌』、「反省会」というのの出發は明治二十年でしたか、そういう運動があるわけです。米峰は反省会の会員でもありまして、一六三五号という監札をもっています。そういうことで生涯禁酒運動の先頭に立ってやっておりますもんで、日本の禁酒運動史からいって米峰の位置は大変大きいわけで、禁酒運動史に必ず米峰が出てくるわけです。これもキリスト教が中心だったもんですから、仏教などが禁酒運動やるものかという風潮の中で、新仏教、哲学館の皆さんがやはりそれを押し進めていく。禁酒運動の方は米峰が新仏教運動をつくるときに

仏教清徒同志会と名乗りましたから、ピューリタンとして清徒と名乗ったからにはおれは煙草は辞めると、好きだったらしいけど、そのときはすばつと辞めて、以降禁煙論者です。

それからいろんな風教の改革というのは、お箱ですから、まずお葬式の改革ですね。葬風改良と、今のお葬式というのはお酒ばかり飲んで人が死んだのに悲しみもしないということです。それから米峰、黄洋共に茶代廃止会という、お茶代ですね、これなんかいいところに目をつけましたね。茶代廃止会というのをつくってやります。それから年賀状廃止会というのをつくります。それから雨天の際には雨傘の置場をつくるべきだという運動をはじめますね。その他こまかいのはいくつもありますよ。例えばこの頃は人力車が交通機関ですから、坂にかかったときは客は必ず下車すべきだ、こんなことを言っています。乗り物では必ず老幼に席を譲る。今の先取りみたいな話ですね。それから車内の禁煙という運動もはじめます。なお、この他にかなり大きくまりました会としましては、新仏教徒も加わって風俗改め会という会をつくって、これは四十一年に発会をやりますけれども、主として女性の地位の向上ですね。それから現在まだ残っている動物虐待防止会というのがあります。これは現在も渋谷の辺にあったと思いますが、これはもともと『反省会雑誌』、『中央公論』に關係しておりました広井辰太郎が言葉をかけてはじめるんですけれども、米峰、黄洋も運動の中心になって動物虐待防止会というのをやります。

でも風教の点で最も後に残るのは乃木希典の殉死批判ということでしょうね。これなどよくぞやったと思います。若くて情熱に燃えていたからだと思いますが、新仏教は、乃木がつめ腹を切って死ぬ、その批判が「乃木希典殉死批判特集号」です。そして特集号の中心になっているのは、境野黄洋の論文です。境野さんはさきほどご紹介した杉村楚人冠の關係もあつたせいでしょうか、朝日新聞の論説委員もやっていますね。それで大正元年九月十四日というのは乃木さんが自殺をしたつぎの日ですね、この日の『東京朝日』に境野黄洋が殉死の批判を書いているわけです。

ね。「乃木大将自殺について―日本の風教道德の一考察―」ですか、これはかなり理路整然とした論文ですが、情においてはとにかくして、理においてはとれないということを理路整然と書くわけですね。日本全国あげて乃木の追悼ということでしょう、明治天皇の後をおつて、奥さんといっしょに亡くなったということは、日本中が非常に情緒的にそういうふうになっている中で書くわけですから、東京朝日がこれは投書でも大変なんですよ。東京朝日に全国的なレベルで書くわけですが、同時に新仏教誌がさつき言ったように特集を組んでいくわけです。この中で黄洋の書きましたものが一番光っておりますけれども、しかしかなり激しい言葉がいくつか出てくるわけで、さきほどの林古溪なんて人は詩人のせいもあるでしょう、乃木大将の自殺は殉死というけれども、縊死や情死とかわりないというわけですね。これなどはよほど勇気がなければできない話ですけど、そういう特集を組んでやる。社会思想ばかりじゃなくて日本の倫理史などにこのことは残しておくべきです。

三

それから最後に少し社会事業のことを申し述べてみたいと思います。自分がいるから言うわけじゃありませんが、東洋大学の社会福祉というのは日本で最も早くできたわけです。できた理由には境野黄洋が学長だったということからきているわけですね。因に今のマスコミ学科もそうですね。あれも境野黄洋のときにできたものですね。あれは文化学科といたしましたか、ちよつと忘れまして。それで境野黄洋自体はむろん社会事業の研究者じゃないが、彼の親友のさつき申しました渡辺海旭ですね。これが東洋大学の教授で境野学長の親友ですから、これが中心になつていろいろ仏教社会事業というふうなものを考えるわけです。この人は東洋大学でも非常に大事な人の一人でしょうから、ちよつと一言はさみますと、ドイツに十一年ほど留学しておりましたけど、そのときロシア革命にぶつかつてさかん

にロシアの革命の志士たちと、ロシアに対する演説をやったりしている人です。そういう世界的な規模の人ですが、帰ってきまして彼自体、日本の仏教社会事業の指導者にもなっていますし、具体的には日本で一番最初の労働共済会、労働者の相互扶助の団体ですね。こういうものもつくっていくわけですね。それはちょうどビスマルクの時期に渡辺先生はむこうに留学していて、これを見てきて、そして日本に適用してみようというわけでしょうね。なお「社会事業」というのもオフィシャルに一番最初に使う人は渡辺海旭で、これは仏教社会事業研究会というのをつくるんです。個人として使う人は片山潜などいますけれども、こういう団体に名称をつけたのは渡辺海旭がはじめてであります。なお磯村英一氏にはきつてもきれない恩師ですね。磯村さんが今の年になって一番思い出すのは渡辺海旭ではないでしょうか。私は直接お会いしたことはないわけですが、新宿の中村屋に海旭を記念して、海旭の号は壺の月と書きまして「壺月（こげつ）」と申しますから、羊羹というのをつくりまして、新宿の中村屋で奥さんの黒光羊羹とならべております。ちよつと宣伝めきますけれども、日本の社会福祉で羊羹になった人はこの人しかいない。話がすこし余談になった嫌いがありますが、そういう意味で大変おもしろい人物ですね。この人たちが結局、黄洋や米峰という親友たちに吹き込んで、やがて大正十年という年に、東洋大学に社会事業科というものが日本の先端を切つてできるということでしょうね。その科で、今歴史を編纂しているから、やがて先生方のもとへ抜き刷りがいくんでしょうけれども、その講師というのはよくぞ集めたと思われるくらいにさつき言った、いわばリベラルの、自由主義のギリギリの線の人ばかりずらつと集めたんです。これは境野学長がいたからできた仕事だと思えます。日本女子大とそれから今の大正大学、元は宗教大学と申しましたけれども、その三つがほぼ枯抗して、社会事業科を置きはじめるんですけれども、その講師やその他の顔ぶれから見る以上は、これは東洋大学はそういう意味での優秀な人を集めておりますね。

渡辺海旭はそれくらいにしておきまして、どうしても社会事業との関係で忘れてはならないのは加藤咄堂、今あんまり学内じゃ有名じゃないですか。最近社会教育の方で評価ができてきました、加藤咄堂の研究というのが進んできておりますね。私も上宮協合理事長を咄堂先生がやっているとき、しばしばお目にかかりましたけれども、この人が哲学館の最後くらいの教員やっていたかな。東洋大学になってからも、明治期から有名な人です、加藤咄堂は。社会教育・社会事業との関係で掘り出していかなくてはならない大事な人だと思えます。境野黄洋自体も社会事業についていくつか論文を書きます。因に加藤咄堂は『朝思暮想』という、これは発禁本になって三十九年三月に。どうですか、図書館の方で一つお調べになっては。なお社会事業の具体的運動としては明治三十年代のインド飢饉という大飢饉がありますけれども、このときの救済運動とか、それから日露戦争の終ります三十八年の東北大飢饉の救済運動とかいろいろなことをやります。今日は別に目新しいことでもありませんけれども、申しあげたかった骨組みというのはこんなことであります。

最後に全体とりまとめているような評価があり得ると思いますが、私が見て、この運動というのはちょっと想像もできないほど、抵抗感が濃厚です。ですけれども、どこか一本足りないというか、よくそういうことがあるんでしようけど、すごく抵抗力があるという人はこれは必ずしも、魅力がないということもありますよね。この新仏教運動と同時期に生れてくる、ご存じの浩浩洞という東洋大学の創立に関係した清沢満之の運動と比べたときに、浩浩洞の方はこれは近代信仰の確立ですから、内面に深く深くはいつていきます。この拡りはわずか真宗大谷派教団、それから東大を中心とするインテリだけであんまり広まりません。でも明治後半期の思想的な魅力というのはどうしても浩浩洞の方に、私なんかひかれるところがあります。なお浩浩洞というのは東洋大学のすぐそばですから、西片ですから、あそこにもなにか記念碑くらい作っておくべきですね。明治の後半の思想界で非常に大きな影響を与えた人です

から、ちよつと墓標ぐらひはあつてもいいのではないか。浩々洞ほど深さが新仏教にないと思います。そして社会運動といたしましても、これはさつき申しましたように社会改良という域を脱しないと思います。むろん社会主義運動ではありません。自分たちも社会主義運動でないと言っているわけですから、個々別々では穏和な社会主義者だといふふうに境野黄洋、その他が言いますが、これは社会改良ということだと思ひます。そして思想運動としてはさつき申しましたように、めづらしいリベラル左派の線だと思ひます。「新仏教」という名前を出しましたように、やっぱり仏教を社会的な常識的な線にひきもどして、そこから教団権力その他と、あるいは国家権力と対立をしていくということが、これを見逃すことができないのじゃないかと思ひます。なお新仏教運動が誕生します明治三十二年といふのは境野黄洋が二十九歳、米峰が二十四歳とです。この研究会がはじめてなもので、ふさわしい話になつたかどうか分りませんけれども、とにかく三十年前の研究だし、これから新しく勉強するといつてもちよつと他のことが忙しいものですから、お茶を濁したような話になりまして大変申し訳ありませんでした。

質疑応答

吉田 この人たちは村上专精、三宅雪嶺を立てるようですけれども、まだ二十歳代とか三十のはじめですから、この人たちの奥のところに井上円了のよき啓蒙家の面とか、在野的な面とかいろいろあるんでしようね。

なお境野黄洋の年譜をつけておきましたが、年譜としてはどちらかという和社会思想に偏っているかもしれません。補填していただければいいと思ひます。

飯島 新仏教の参加者は真宗系ですか、それとも宗派にこだわらないですか。

吉田 ぜんぜん関係ありませんね。海旭さんは浄土宗ですが、米峰さんはもと真宗の本願寺派の寺に生れましたけれども、のちほど宗門外に……。さっきの伊藤左千夫とか、それから絵描きさんで芸大の教授をしていました結城素明とか、沢山おります、僧侶でない人も。

飯島 この運動はいつ頃どんな形で消えていきますか。

吉田 その話を申し上げないですみませんでしたけれども、結局大正四年八月、十六巻八号で廃刊になるわけです。その廃刊になった理由としてそれぞれの言い分があるんで、後から整理してみますと、一つは外部の評論家たちは信念の自由に討死にしたんだというきれいごとを言ってくれますけども、戦時中よくありましたね、『中央公論』を読んでいるのは地方へいくとマークがあつたでしょう。だから『新仏教』を取っているのはということと地方でマークをされているということがあります。それから中央では尾行がついたりしています。こちらの方からいけばまさに討死にということが言えるかもしれませんが、もう一方からいえば、やがてこの人たちが四十代になり、あるいは三十代の後半になって、境野が学長、学長になるのは早いですね、四十いくつで学長になるんですから、ですからそういうふうに大人になっちゃったということもあるんじゃないでしょうか、個々に即して考えれば。

飯島 社会主義の冬の時代をなんとか過した大正四年でしたら、大正デモクラシーが出てくる、その波に乗ることがなかったのはなぜかという疑問が……。

吉田 当然です。今考えれば大変惜しい気もするんです。まさに花開くときに辞めちゃったわけだから、無論、会は続いてはいたんですけど、雑誌は廃刊に。さっきの林古溪たちが中心になって。境野黄洋は四年にはまだ運動から手を引いてはいません。ややOBのような形で、あの人が学長になるのが、七年で雑誌辞めてからまもなくですね。

明治から大正のはじめにかけての東洋大学というのは、よく社会事件をおこしますね、哲学館事件とか。境野黄洋

もそうですけれども。

飯島 これは新仏教の機関誌の内容を分析すれば分かることだと思いますが、円了さんが旧仏教の活性化というかたちで、旧仏教の教えの内容を生きた形でうけとめようという方式をとったのに対して、今度は全く別に新仏教と新しいものを創出しようということだとすると、新仏教の教義内容といいますが、こういうことについての考え方はどうだったんだろうかと……。どうも内容よりもつばら外形が……。

吉田 そうですね、そういう感じは否めませんね。

高木 「宗教制度を保持する必要を認めず」という……。

飯島 外形的なもの、それから社会的な関係、そっちの方に重点があつたようで、新仏教にふさわしい中身の方をどう考えていたのか。

高木 外形では信仰運動にならないでしょうね。宗派もなければ、教義もない。それではヒューマニズム中心の活動になってしまう。

吉田 円了先生は新仏教の人びとに、君たちの方は新しいと言わずに、まことの真ですね、自信があつたら真仏教と名乗ってみると言っています。円了先生の方は活仏教です。

飯島 廃娼運動などの風教上の運動のほとんどは雑誌にのっていますか。

吉田 そうですね。廃娼運動の加盟は会として、それから禁酒運動は米峰が主だけれども、かなり多くの人が、渡辺海旭などもそうですね、運動形態をとっているものは会としてやっているわけですから。

高木 会の母体というものはどこかにあつたんでしょう。

吉田 教団の中に入ってで勝負しようということまではいかないようですね。教団の側でもだいたい新仏教の講

演会というのは場所を貸さないんですね。だから講演会の会場というのも、ユニテリアン、どっちかというときリスト教寄りですよ。だからユニテリアンを使うわけですね。ユニテリアンは新仏教に対して非常に親しみを感じていましたけれども、結局仏教のお寺やなんか借さないもんだから、そこで……。

針生 渡辺海旭はドイツでなにを勉強したんでしょうか。

吉田 一番やりましたのは、やっぱり業績としてはチベット語やなんかでしょうな。本当はサンスクリットをやりに行ったんです。

海旭のは小さい寺ですけども、深川の方の。よくその頃国際テンプルといわれ、インドの独立の士、その他がぞろっと来ていまして、それでボースなどは中村屋にかくまわれていて、中村屋が淀橋の警察にとりまかれたこともありましたね。ボースという人はとうとうかくまわれなくて、自分の家の御嬢さんにしたわけでしょう、中村屋の。

松岡 さきほど社会主義とのまじわりについてお話がありましたけど、どの程度の交わりですか。

吉田 両方とも月例会がありますね。それに参加しあうという、そういうことですね。お互いに慰めあっていたんでしょうね、多分。

針生 大逆事件について境野黄洋なんか論陣を張ったというのですが、円了のところ書生をしていた内山愚童なんかについては書いていないんでしょうか。

吉田 私の大逆事件研究はちよつと私のいきみ足のところもあって……。確かに愚童と円了は距離的には近いんですよ、長岡と小千谷と。それで愚童の弟が「円了先生のところに兄貴が「厄介になっていた」ということを、そのまま鵜のみに信じたのですが、それが本当かどうかというところまで、詰めていないんです、私自体。そこところ円了側はどうですか。

高木 郷土史家の話で、その関係をよく知っている人がいるということ、長岡の真言宗の寺へ調べにいったんです。伺ったところが、その方が亡くなった直後で、それでなにも分かりませんということでした。

針生 そのことについては熊本で『遺言』という雑誌に柏木という人が書いていました。その人は岐阜の方にいるとか。

吉田 私は愚童の弟が小千谷におり、甥が柏崎におりまして、たずねております。三十何年まえに、弟さんからの聞き書きをそのまま信じたところがありますね。

(昭和六十年十一月二十八日の第二十七回研究会における報告——文責 三浦)

本文中で発禁処分をうけたと指摘された雑誌等について、東洋大学図書館における所蔵関係を調べたところ、『新仏教』第一四巻第一〇号と第一五巻第一〇号の二冊は所蔵されていることが確認された。